



心が深く負う傷は

すぐに癒えないけれど

その悲しみの淵から

私に呼びかけるものがある

あなたはあなたでよいのだと
気づいたときから生きられる

このかけがえない私に
いのちが今、きらめく

(御遠忌テーマソング)

「今、いのちに目覚めるとき」より

目次

contents

組門徒会員の改選について／組門徒会員研修大会報告	3
教区教化委員会ニュース	4
推進員養成講座の取り組み	6
親鸞の鼓動・九 聖典講座「化身土巻」に学ぶ	8
御遠忌通信	10
ちょっといこか／しゃらりんちゃん	12

悲

書 畠中幸代

真宗大谷派では、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌を迎えるにあたり、御遠忌テーマ「今、いのちがあなたを生きている」を一人ひとりに考えていただくきっかけとして、御遠忌ソング（テーマソング・イメージソング）を募集し、全国から725作品が寄せられました。応募作品の中から、御遠忌ソング最優秀賞を大阪教区第6組願光寺の茨田通俊さんが受賞されましたので、その歌詞を表紙にさせていただきました。また、この歌詞から思い浮かべる漢字一字を茨田さんに出していただきました。

組門徒会員の改選について

	計	再任	新任	責任役員	総代	推進員	帰敬式
会員数	1062	758	304	189	488	244	452
男性	926	660	266	185	477	196	385
女性	136	98	38	4	11	48	67

組門徒会員の任期満了に伴い、さる3月10日付けで組門徒会員が改選されました。

特に今期は、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌を直接担っていた大切な時期でもあることから、任期3年の間、御遠忌に関する取り組みに積極的に参画いただくことが願われています。

なお、組門徒会員の内訳は上の表のとおりです。



組門徒会員研修大会を開催

さる5月9日、難波別院本堂、同朋会館講堂及び研修ホール講義室を会場に、組門

徒会員研修大会が盛大に開催されました。当日は、新任の会員と再任・以前経験した会員に分かれてオリエンテーションを行い、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌に向けた両堂再建の歩みや、組門徒会員としての使命と役割についての学習を行いました。



その後、本堂に会場を移し、参加者全員が一同に会して、御遠忌イメージソング『この偈（うた）』の紹介や、御遠忌法要の平日のお逮夜で用います法要次第による勤行を行った後、湯浅成幸氏（熊本教区山田寺前住職）による「世法と仏法の分水嶺」と題した講演を聴聞し、会員一同門徒会員としての使命を自覚し、役割を荷って取り組む第一歩となりました。

教区教化委員会ニュース

指定同朋の会

教区教化委員会「研修・講座部」(成井曉信幹事)では、1寺院に1同朋の会の結成の実現を目指し、主に同朋の会未結成寺院を対象に、2年間で10回の法座を開いていただき、同朋の会結成につながるはたらきかけをしております。そこで、今年度は第3組金剛寺と第11組教信寺を対象に実施しております。



指定同朋の会・於金剛寺

両寺とも、法話の後、講師を囲んで懇親の場があり、今後座談会を通して自らの生活を語り合いながら仏法にであっていく場を持つていければと思います。

巡回法座

教区教化委員会「研修・講座部」では、平常の教化事業がほとんど難波別院で開催されることから、少しでも法座に触れていただきたいという願いのもと、難波別院から遠隔地にある寺院を対象に巡回法座を本年度5会所(和歌山県2会所(橋本・新宮)・奈良県宇陀市1会所・奈良県吉野郡2会所)で実施されました。

「在日」問題に学ぶ講座

教区教化委員会「研修・講座部」、「在日」問題に学ぶ実行委員会では、さる6月3日、教区教化センター研修室において、俞漢子氏を講師に迎え、「名告りは、独立宣言」をテーマに「在日」問題に学ぶ講座を開催

し、70名が参加しました。当日、聴講した編集委員からの感想です。



60名近い参加者は俞漢子さんの言葉を聞き漏らすまいと真剣に耳を傾けていた。最後尾で聴講していた僕には、参加者の姿勢がそんな風に見えた。

韓国国籍を持った在日朝鮮人であると言われる俞さんにとって、自分は自分だと名告ることの困難さをいろいろな場面を通して丁寧にと語られた。「息子の卒業式にチマ・

チョゴリを着て行った時、周りの目が真つ直ぐに見えないで、斜めに見ていると気づき大きなショックを受けた。そのことを友達に言つと「そらしゃあない」「だって知らんねもん」と言われた。そんなことを通して、自分の名告り、自分の言いたいことは面倒くさいが丁寧に、繰り返し言うことが大切であると感じた」と語られる。また、『「本名」という朝鮮名を語ると周りが一変する時だった。私は、名は単なる符号ではなく歴史だと感じるようになった』というチラシに添えられた独立宣言の一文からも、自分を本当に頭かにしていきたいという思いが伝わる。

また、話の中でなぜ僧侶は、法衣を着て病院には行きにくいのかと問われた。俞さんの答えは、それは葬式仏教になってし

まっているからじゃないかという。いま病んでいる人にこそ生きる力を与えるのが仏教であるのではないか。その俞さんの問いかけは、まさに僧侶としての名告りをどこか横において、僧侶として生きているのではないかと感じさせられた。

「電車に飛び込む自殺者を考えると、現代という時代の中で誰もが自分を掴みきれず、自分が見えないでいる。だから、今こそ名告りということを実際に考えるべきである」と叫ばれる俞さんの迫力のある種の感動をもって聞かせてもらった。

(廣瀬 俊さん)

真宗の仏事と法事を考える講座

さる、4月9日、教区教化委員会「儀式・法要部」(辻澤孝司幹事)では、真宗の仏事と法事を考える講座を「恒例法要と別修法要の儀式的構成について」と題して開催しました。

当日は、講師に近松譽一氏(第4組慧光寺住職)を迎えて、法要の格の軽重についてや、法要の成り立ちについて歴史的視点からも語られ、受講者は熱心に聞き入っていました。

青少年活動に学ぶ

実行委員会

今年度、「青少年活動に学ぶ実行委員会」では、「であい」をテーマに、ショートフィルムを作成しました。その取り組みについて、委員から一言いただいております。



この委員会は青少年団体のメンバーが中心で構成されています。今年度、僕たちはショートフィルムを作成しました。とはいえ実写の紙芝居のような作品となりました。まだまだ未熟な僕たちですが「何がしたいのか、何ができるのか」という話し合



青少年活動に学ぶ実行委員会

いから始まりました。委員全員で意見を出し、協議し、実行してきました。願っただけではなく行動するということも大切になっています。今後はもっと大きな活動をしていきたいです。

(青少年活動に学ぶ実行委員・吉内利彦さん)

ハンセン病公開講座

教区教化委員会「行事部」(三好泰紹幹事)では、さる4月10日に公開講座「ハンセン病問題はまだ終わっていないー共に生きる社会をきりひらくために『私にできることとはー』を開催しました。

当日は、ビデオ上映、神谷誠人氏(ハンセン病国賠訴訟瀬戸内弁護団)の講義が行われました。参加者は、「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」の趣旨・目的並びに基本理念を通して、地域から孤立しない安心して豊かな療養所の生活環境の確保と退所者の社会生活支援のために、私たち自身が取り組まなければならないことを学びました

門徒女性と坊守の集い

さる5月14日、「研修・講座部」では、門徒女性と坊守の集い研修会を「こころの



門徒女性と坊守の集い

取扱説明書ー悲しみやつらい体験から見えてくるものー」と題して開催し、150人が参加されました。

講師には佐賀枝夏文氏(大谷大学教授)を迎え、カウンセラーとして活動している中で、相談にくる学生の話や、ご自身の体験などを交えながら語られました。

視聴覚伝道部のDVDが完成

視聴覚伝道部では、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要を控えるこの時期に鑑み、『宗祖親鸞聖人の生涯』を制作しま

した。

例年の事業では、真宗の教えが生活の上に開かれることを願い、日常の身近な題材を通して真宗を表現してきました。しかし御遠忌を前に、今一度、宗祖はどのような方であったのか確認し直すことが必要ではないか。そのような思いから、親鸞聖人の生涯を伝える教材の制作に至った次第です。

この教材が、御遠忌の周知とより一層の理解に役立ちましたら幸いです。

(視聴覚伝道部幹事・平野圭晋さん)



DVD『宗祖親鸞聖人の生涯』

推進員養成講座の取り組み

実施組からひとこと

第19組

現在、第19組では、第8期推進員養成講

座を実施しており、20数名の方が参加してくださっています。講座の内容は、勤行に始まり、テーマについての説明、座談会、講義となっており、約3時間ほどの時間の中で行っています。

今回の講座の大きな特徴としては、講座の進行を若手の「寺族」が中心となっており、進めているということ。そのことに関して参加者の方からは、「講座というから堅い雰囲気だと思っていたが、若い人が多くて安心した」というご意見をいただいております。

参加者の方々は、お寺という場に対して堅苦しい印象を持たれていることが多く、中には講座に参加して、初めてお寺にお参りしたという方もおられました。これは、寺に生きる我々全員が何とかしていかなくてはならない問題ではないでしょうか。

スタッフとして参加させていただくと、ご門徒の方が持たれている考えを、



より身近に実感することが出来ます。その中で、参加している我々自身も、多くのことを学び、普段の自分を見直すきっかけをいただいています。このような場に出会うことができたご縁に感謝し、参加者の方と共に学んでいきたいと思っています。

(第19組了信寺・高間弘昭さん)

第25組郡山

何年かぶりに、第25組郡山において、推進員養成講座を実施することになりました

た。当初、養成講座という名前がどうしても気になり、話し合いの中で真宗のお話を気軽に聞き願いたいとの気持ちから「真宗講座」という名前で実施する運びとなりました。大和郡山地区は、住職も高齢化が進み、代務住職も多いので参加者を募るのが困難という状況の中で、1カ寺2名以上の参加者をいただいたことは喜ばしい限りです。

この真宗講座は、参加者の皆様だけでなく、組内寺院も積極的に参加し、ご門徒とも問題提起という形でお話いただき、座談会を中心とした(参加者の皆様の声を聞く内容で第4回まで進めてきました。

各講座のテーマは、「お内仏の意味」、「先祖供養と私」、「自分にとってしあわせとは」、「私にとってお経とは」とし、身近な問題ということもあり、活発な意見を聞くことができました。今後は本山同朋会館での後期教習を控え、いよいよ『現代の聖典』をテキストに講座を進めていく予定です。

最後にこの講座を通して推進員となられる皆様には、真宗の教えを「寺族・推進員ともに聞法し、お寺が聞法の道場として機能すべくご活躍願いたいと思います。

(第25組郡山願正寺・寺本哲さん)

組推協結成について

推進員養成講座終了後、推進員の方の継続的な聞法・学習と推進員同士の相互理解を深める場の確保として結成を願われております組同朋の会推進員連絡協議会ですが、現在、教区内におきまして12力組が結成されております。その中で、今年度新たに結成されました第3組の会長に一言いただいております。

2009年 1月21日に難波別院で、第3組同朋の会推進員連絡協議会を設立するための会議を持ち、2年前の推進員養成講座の修了者をはじめ、それ以前の推進員養成講座に参加された方を含め、推進員連絡協議会を設立しました。

2009年6月16日には、はじめての研

(第3組浄安寺門徒・山崎 明さん)

大推協奉仕団

大阪教区同朋の会推進員連絡協議会(田口タズ子会長)では、お待ち受け奉仕団としてさる1月27日から29日まで、テーマに「宗祖としての親鸞聖人に遇う」を掲げ、上山してきました。参加された方から一言いただいております。

浄土真宗はもととお講(座談会)教団と言われ、教団のいのちともいえると思います。土徳がお育ての原点であり、土徳の原点はお講なのだと思います。お講とは、自分のありのままの姿をあらわして自分を尋ねる道場です。自分の殻が破れるか破れないか、その一点が問われているのだと思います。教導先生のお話では、お講には講僧・お講捌の方がいて、その役目が大切ですが、今はそういう人が育っていないと聞きました。また、たびたびの語り合いがあれば「弥

陀の法水を流せ」の教えどおり、門徒の数だけの道場が生まれるはずだとも言われ、私自身が道場のはたらきを持つているのか問われたことでした。

(第27組妙蓮寺門徒・野崎玲子さん)

近ごろ「聞法」とはどういうことか気になるでした。そんなとき大推協お待ち受け奉仕団の案内をいただきました。日程をみると、「おはなし」「おはなしあい」がそれぞれ5回もあり、講話がない。風変わりな奉仕団だと思いました。それで、座談会を期待して参加させていただくことにしました。

〈おはなし〉で聞いたことは、「お講」についてでした。昔は、講僧の法話(おはなし)に続いて講捌(こうさばき)が座談(おはなしあい)を切り盛りするということがあったそうであります。まさに私が望んでいた場でありました。

私の周りを見渡してみても、聴聞する場はたくさんいただけでも、それを確かめ合うという場がなかなかありません。そのような場がどんどん増えていただくことを願うことであります。

(第20組願久寺門徒・関根清壽さん)



親鸞の鼓動

七百五十年の響き

九

これまで、『教行信証』『化身土巻』という重要な位置づけがされてこなかったように思いますが。江戸時代の講録を見えますと、真実をはつきりするための踏み台のような位置づけでしか表されていません。つまり真実が明らかにしなければ要ないというような位置づけです。しかし、浄土真宗でいうと、「化身土巻」を見出したということが仏教の歴史における大きな

転換点であったのではないかと

「聖典講座」より

「化身土巻」

に学ぶ

藤場俊基先生

思います。浄土真宗というのは、方便を見出して獲得した教えということができるように思えるのです。つまり、方便こそが私たちにとって重要な意味をもっていて、方便が明らかにしなければ真実は明らかにならないということです。これは逆ではありません。私たちは真実が明らかになる、あるいは真実をきちんと受け止めることができるという前提を立てていますが、実はこれが真実だと明確に理解できることもできないし、説明もできないのではないのでしょうか。仏の智慧、仏の真実を私物化できないのが私たちなのです。では、私たちが仏の真実の教えにどのようにして触れるのかというと、方便によって触れていくしかないのでしょうか。あるいは真実に触れたという錯覚を持たないために方便が必要なのです。過ちを犯すときにそれが過ちであるとしつかり認識できる、これが仏の智慧のはたらきであって、そのような重要な課題を「化身土巻」は担っているのです。

もう少し具体的に言いますと、私たちは仏を仏であると見抜くこ

とができないという問題です。もし、お釈迦さまが当時の姿で私たちの前に出てきても、悟った人だとわかるかというかわかりません。私たちは本当の覚者を見極める智慧がないのです。私はこれを「こんにやく知らずのこんにやく探し」と言っていますが、こんにやくというのがどんなのか知らないでスーパーにいつても絶対見つかりません。私たちは仏に会う方法もわかりません。どうなったら遇ったことになるのかもわかりません。念仏をしろといわれても、それに反発するのが私たちです。念仏しなさいと言われても、受け入れることができない私たちの問題があります。しかし、仏を見極めることができない、あるいは念仏しなさいと言われても受け入れられない私たちを相手にしているのが浄土真宗で、それが「化身土巻」の課題なのです。

親鸞は十九願を『観経』の心だとおっしゃいます。その主人公が頻婆娑羅王と韋提希です。その『観経』の中で苦悩する韋提希に対して仏が言った言葉は念仏しなさいではなく、「観想」を勧めます。精神を落ち着け集中していく方法です。私たちが宗教に触れていくときの第一段階はここからしか入れないのでしょう。本物を見極める智慧がないものが、本物から始めようとしても何が本物かわからないのですから、自分の気に入るものを本物にして始めていくことしかありません。念仏をしなさいと言われても、最初はいやなものです。私たちは向上心とか、努力精進とか、意味や価値があるというのが大好きです。だから、私たちは日常意識の中では念仏をしなさいといわれ

でもそんなことで大丈夫なのかという思いが出てきます。

『観経』では、極楽世界の阿弥陀仏のもとに生まれたいといった韋提希に対して、仏は念仏しなさいと勧めません。『観経』の中で韋提希は、頻婆娑羅王が阿闍世に殺されかかり、自分も幽閉される場面で、

時に韋提希、幽閉せられ已りて、愁憂憔悴す。はるかに耆闍崛山に向かいて、仏の為に礼を作して、この言を作さく、如来世尊、在昔の時、恒に阿難を遣わして来らしめて、我を慰問したまいき (聖典91頁)

というように仏に来てほしいとは言いません。阿難の訪問を願います。いつも困ったときには阿難を遣わしてくれて慰めてくれていたのです。これが韋提希の宗教心です。そこで善導は『観経疏』で、なぜ仏に来てくださと言わず、弟子に来てほしいとお願いしたのかという問いをたてます。そこで善導は、韋提希は阿難に自分の問題を全部話したら、阿難は帰ってお釈迦さまに報告し、それを聞いたお釈迦さまがいい智慧を出してください、また阿難が自分のところにきてアドバイスしてくれるにちがいないとしています。本当に聞きたいのはお釈迦さまの方だけれども直接その前に立ちたくない。本当のことを見抜く人は怖い存在なのです。つまりそこにいるのがわかっていてのに遇うことができないということです。そのような韋提希のもとに仏が来ます。そして韋提希は仏に次のように言います。

世尊、我、宿何の罪ありてか、この惡子

を生ずる (聖典92頁)

なんでこんな目にあうのかと。そして、愚痴をこぼす中から求めていく中で、焦点が定まってきました。そこから清浄なはたらきによって生み出されてくる世界を見たいと願います。「清浄業処」です。そこで、仏が眉間から光を出して諸仏の世界を見せるのです。『観経』では四つ代表的なこととして出てきます。一つ目が「七宝合成」で、きらびやかに莊嚴されていることを意味します。二つ目は「純是蓮華」で、蓮華はさとりを象徴しています。三つ目は「如自在天宮」で、すべてが思い通りになることを意味します。そして四つ目が「如玻璃鏡」で、純粹や透明を表します。つまりこの四つ

で諸仏の世界を代表させているのです。私たちが宗教に対して持っているイメージというのは大体この四つではないでしょうか。しかし韋提希は選ばず、極楽世界の阿弥陀仏のもとに生まれたいと願うのです。これは私たちの姿と言えるでしょう。見たらほしくなるのです。そしてほしくなったら何とかなると思うのです。しかし、求めているものが射てるかどうかはわかりません。極楽を求めているから極楽がわかるかというところではありません。では、たくさん見た世界の中からなぜ韋提希が極楽を選んだのでしょうか。『阿弥陀経』にもありますが、極楽というのは苦がない世界です。これが彼女の関心を引いたのでしょうか。浄土がどういう世界かわかったのではなく、苦しみがなくなることがほしかったのです。

それを聞いて韋提希は思惟と正受を教えてほしいと請います。これらが宗教に触れていく場

合の最初なのでしょう。つまり、韋提希と同じことが起こってほしいと願われているのです。これが十九願です。勘違いだとしても、なんとかしたい、救われない、教えてほしいと宗教的領域において願われているのです。王様になることに一生懸命だったのが、それではなく極楽浄土という宗教的領域に対して関心が向いているのが至心発願です。安田先生から学んだことですが、迷っている人間は、迷ったところからしか始められない。これを否定したら浄土教も成り立たないわけです。私たちは自力無効と言って、努力精進することを最初から切り捨ててしまっています。しかし、自力は無効であったとしても、決して不要ではないのです。求めるべきものが何かわからないまま求めていくということを、それでもいいから求めるということが起こってほしいというのが十九願です。そこからしか始まらないのです。それを經典の中で見せてくれるのが『観経』です。本来ならば出遇うはずのない法が、私たちとどう接点を持つかというのが浄土教の一つの重要な課題です。その入り口として『観経』は非常に大事な位置づけとなり、これがなかったら出遇うということが成立しないのです。まちがった了解と言わざるをえないけれども、誠実に対応していこうとするのが『観経』であり、その課題を担っているのが「化身土巻」であるということができそうです。

(文責・しゅらりん編集部)

大阪教区

御遠忌通信

第15組お待ち受け大会

さる6月6日、大阪教区第15組では宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌お待ち受け大会



として、第38回仏教文化講演会を、大東市民会館において開催しました。

この仏教文化講演会は1971年（昭和46）から、仏教、真宗の教えに造詣の深い先生方をお迎えして、毎年継続して開催しています。

今回は御遠忌お待ち受け大会として、宗祖親鸞聖人について多くの方に知っていただく機会となる事を願って開催しました。

当日は、まず舞台上に安置された本尊に向かい、参加者全員で正信偈同朋奉讃式の勤行を行いました。勤行に引き続き、開会の挨拶として藤本裕正組長から御遠忌お待ち受けに向けてこの講演会開催の趣旨が話されました。また、小松崇大阪教区会議長から宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌を迎えるにあたり、その意義など挨拶が行われました。

した。

講演会は大谷大学文学部の沙加戸弘教授を講師に迎え『親鸞聖人伝絵』に学ぶ」と題して、約2時間にわたり行われました。

講演では、まず親鸞聖人が教示された仏教はどのような教えであったのかについて、生活での身近な例をあげて語られました。続いて舞台左右に御絵伝四幅を安置し、中央に設置したスクリーンに御絵伝のスライドを映写して、講談のような語り口に会場の雰囲気を変化させ、鳥の羽を絵の指示棒として用いて絵解き風に御絵伝に描かれている

「得度」や「信行両座」「弁円済度」など1段1段を取り上げ、そこに描かれた親鸞聖人の生涯について、ユーモアを交えて講演されました。

公演時間の関係で、四幅すべての絵解きは叶いませんでしたが、御絵伝に表されている親鸞聖人のご生涯を学ぶ事を通して、聖人の課題が現代の私たちひとりひとりととても課題となっていることを御教示

いただきました。

その後、五辻信行難波別院輪番が挨拶を行い、恩徳讃を斉唱して講演会を閉会しました。

また、15組では2011年の宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌に向け、推進員養成講座の開催を企画し、現在各寺を通じて参加を呼びかけています。

（第15組本念寺・辻岡 恵さん）



お待ち受け期間の日程

さる6月24日の第5回教区御遠忌委員会総会において、教区御遠忌お待ち受け期間の法要や行事・イベントの日程が確認されました。

お待ち受け法要は3月27日の難波別院での法要を皮切りに、教区内各別院を会場として順次法要が勤まります。またお待ち受けの行事・イベントも随時開催され、多くの方

お待ち受け法要

2010年

3月27日(土) 午後1時～

難波別院『坂東本』影印本贈呈
兼組門徒会員研修大会

4月27日(火) 午後1時30分～

茨木別院

5月15日(土) 午後1時30分～

天満別院

6月27日(日) 午後1時30分～

大和大谷別院

7月3日(土) 午後1時30分～

八尾別院

10月27日(水) 午後1時30分～

難波別院(報恩講結願速夜併修)

10月28日(木) 午前10時30分～

難波別院(報恩講結願日中併修)

の参加が望まれています。

次号では、教区会・教区門徒会の議決を得た「大阪教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌基本計画」の概要をご報告します。

2010年

お待ち受け教化事業

(行事・イベント)

3月28日(日)

子どもの集い

4月10日(土)

コーラス大会

4月15日(木)

市民親鸞講座(第1回)※

大谷保育協会園児合同参拝

4月17日(土)

全推進員の集い

5月8日(土)

教区同朋大会

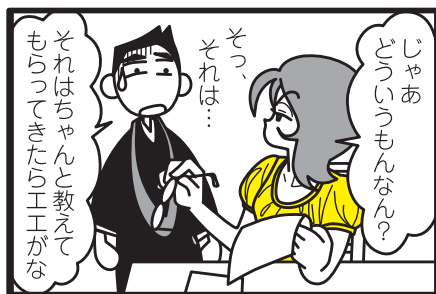
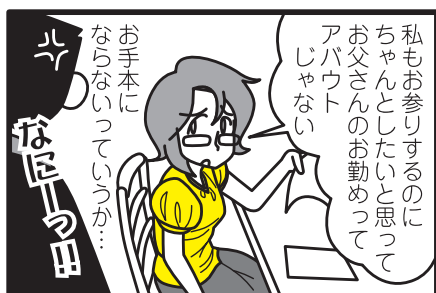
5月22日(土)

青少年ライブの集い

10月31日(日)

教区スポーツ大会

※市民親鸞講座は難波別院を会場に、5月・7月・9月・11月と計5回実施される予定で、その他、奈良県・和歌山県・兵庫県でも各1回の講座が予定されています。



インドネシア料理 チタチタ

CitaCita



■南御堂周辺のお店紹介

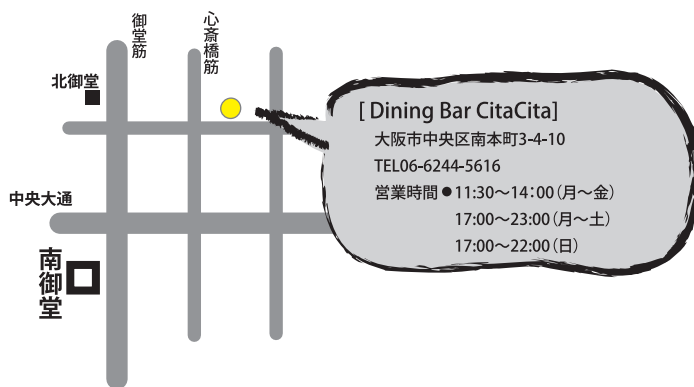
だんだんと蒸し暑くなって来たので辛いものを!というわけで今回行ったのはDinningBar CitaCita(ダイニングバーチタチタ)。チタチタとは夢や希望を意味します。心斎橋筋商店街を北に抜けたところにあるインドネシア料理のお店です。

コンクリートのビルに入ると、大きな吹き抜けのある木調の空間で雰囲気は一転します。店の奥には大きなガルーダ像があり、まさに「パスポートのいらないBALIリゾート」。カウンターバーやオープンキッチンのある1階を抜けて、2階の栈敷座敷へ。

まずはピンタンピールで乾杯。せっかくなので、メニューから一番辛いと書いてあるアヤム・ヒジャウ(グリーンカレーのかかった鶏肉料理)を。青唐辛子がふんだんに使われていて、辛い辛い。ピールがとても進みます。本場のものは、生の青唐辛子なのでもっと辛いとか。もちろん、辛いものだけでなく、甘いもの

も。パイナップルのピザは甘酸っぱくてお口直しにちょうど良い感じ。

カクテルなどのドリンクやデザートも充実していますし、ランチもあるのでちょっと試してみてもいいのでは?



編集後記

◆私はこの春に出産

し、家族が一人増えました。子どもができるにこれ程に自分を思い無償に愛して育ててくれたことを身をもって知りました。◆子どものお陰で親になり、親になってこそ親の気持ちかわかる。そしてこれからは、子どもを育てるようで、子どもを通して親として成長していくのかもしれないですね。いくら親の気持ちを書いた書物を読んでもわからない事だと思いました。◆また、妊娠を経て出産し育児をしていると、どんなに愛情に餓えて育ったと言う人でも、私たちが記憶のない時期を誰かの世話にならない限り、今生きてはいないのだと思うと私自身も思春期にはずいぶん偉そうな事を言ったことに今さらながら反省しています。◆いつの日か、この身を育ててくれた親に心から感謝できるように思わせてくれた子どもにもありますがとうとう言えるようになります。(H)

発行日:2009年6月30日

発行所:真宗大谷派大阪教務所
大阪市中央区久太郎町4-1-11
TEL06-6251-4720

発行人:五辻信行

編集: 第4組 常樂寺・久世見証
第9組 淨園寺・難波美千子
第10組 是三寺・北川浩三
第12組 清澤寺・澤田 見
第17組 法親寺・廣瀬 俊
第27組 願隨寺・平野圭晋
第27組 信證寺・吉内利彦
第27組 淨宗寺・畠中晃子

<http://www.icho.gr.jp/shararin/>